

「狭い戸口から入るように努めなさい」（24 節）と、イエスは語りかけています。イエスご自身が、私たちの入るべき戸口として立っておられて、そこから入りなさいと招いておられます。私たちを救い出したいからです。ところが一方で、その戸口から「入ろうとしても入れない人が多い」（24 節）と指摘されています。

なぜ、入れないのでしょか。1つは、もう既に自分は戸口の中に入っていると思ひ込んでいるからです。本日の箇所ではイエスが話している相手はユダヤ人です。彼らは、旧約聖書において救いを約束された人物「アブラハム」（28 節）の子孫であるが故に、また、これまでイエスと「一緒に食べたり飲んだり…（イエスから）教えを受け」（26 節）てきたのだから、もう既に救いの戸口から入っているだろうという自負心があったのです。受洗し、イエスの教えを聞き、イエスに従おうとしているキリスト者もまた、例外ではないということになるでしょう。さて、入れなかったもう一つの理由は、戸口が狭かったからです。なぜ、「狭い」のでしょうか。それは、イエスの求められることが、人には不都合なことが多いからです。「敵を愛せ」と言われても敵を憎むし、「人を裁くな」と言われても人を裁くし、「神の前に富を積み」と言われても自分のために富を積みたいのが私たちです。イエスの戸口は、東西南北に広く開かれているけれども（29 節）、それを「狭い」と感じて入ろうとするのを渋っているのは、どうも人間の側であるようです。

しかしだとすると、一体誰がイエスの招く救いの戸口から入れるのでしょうか。そう、誰もいないのです。イエスが感じて欲しかったのは、まさに「自分は（戸口の）外に投げ出されることにな」（28 節）る立場にあるのだという緊迫感でした。イエスは「エルサレムへ向かって進んでおられ」（22 節）ます。それは、エルサレムにおいてイエスが十字架で亡くなるその最期まで、イエスの招く戸口の中へ誰一人入り切れなかった道りを読者に思い出させます。それでも、イエスは最期に「成し遂げられた」（ヨハネ福 19:30）と言われて亡くなりました。私たちの誰一人として、イエスの戸口から入ることができない、そこに入るに値しない、そう実感させることが十字架の役割でもあったからです。

イエスの示した救いの本質は、救われるに値する行いをしたかどうかではなく、こんな救われるに値しない私でも神は愛してくださるということにあります。そして、その深い意味合いを味わい知ったあなただからこそ、敵を愛すること、人を裁かないこと、神の前に富を積むこと、そのような狭い戸口への第一歩を踏み出していくことが出来るのだとイエスは語りかけているのです。

（文責：望月達朗牧師）

